

そのことはヤマト王権とこの北九州在住の豪族が、いかに親密な関係であったのか想像に難くない。

北九州の曾根の豪族が、ヤマト王権しかも中央氏族の物部氏の一族に入っている。当時の一族に属するというのは、婚姻関係を結んでいるわけではない。

「物部」の姓をもらっているのは、**擬制的同族関係**（ぎせいてきしゅうぞく）（実の親子ではない者が、互いに合意のうえで実の親子であるかのような一定の役割関係をもつこと）。

しかし、これには養子縁組は含まれない。

戦国時代の殿と家来、あるいはやくざの親分、子分といった関係を結んでいるもので、中央の物部氏の一族で、古代規矩（おほのて）（**聞**）郡に所在する

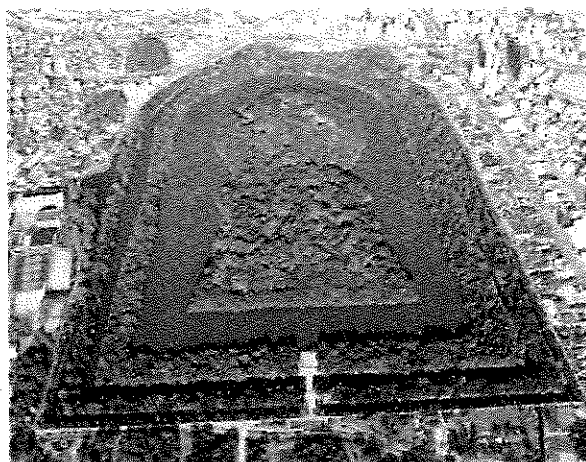
豪族の名前が「**大斧手**」（おほのて）ということである。

そうすると五世紀中々後半代にすでに中央の物部氏と擬制的同族関係を結んでいる在地の豪族が、規矩郡に存在していることは、古代の規矩郡の範囲である北九州市の門司区・小倉北区・小倉南区曾根だけでなく、蒲生、守恒、徳力、呼野あたりまで範囲に含まれる。そうならば当然この徳力にも物部氏の影響が少なからずあつたし、さらに規矩郡の物部氏一族がいたことも考えられる。

したがって、神理教本院に言い伝えられている「第十二代物部伊美岐が九州に下り……」という記事は、「全国の疫病を平癒し……」という事象を証明することはできないが、

「物部……」という記事は証明もかなわないが、積極的に否定することもできない。

むしろ古代の研究がほとんどされておらず、古代豪族の名前すら公に明らかにされていない明治期に、すでに神理教本院において「物部氏云々」という記事が伝えられていたことは、驚愕に値する。



仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）



大阪府堺市・百舌鳥古墳群（南東から）
手前が土師二サンザイ古墳、右上が仁徳天皇陵古墳